

留学を終えて

岐阜高校 岩下 璃乃（ドイツ）

ドイツのニーダーザクセン州での留学を終えた今、この一年を振り返ると、新しく出会う人との信頼関係を築き、たくさんのことを共有し話し合う機会に恵まれた素晴らしい経験でした。人々と関わりながら様々なことに主体的に取り組むことを心掛け、私は大きく成長することができました。

私が留学を決意したのは、新しい環境の中で様々なことに挑戦し、新しいものの見方、考え方を学びたかったからです。幼い頃から国際情勢に興味があり、語学学習にも積極的に取り組んでいました。ドイツでは、自分の興味関心を深め、将来の目標に向かうために、人との交流やプロジェクトに積極的に参加しました。

一つ目の成果として挙げられるのは、たくさんの人との交流を通して視野が広がったことです。特にホストファミリーとの関係は、私の留学を充実させた最も大きな要因です。私には2つ目の家族ができたと言えます。それほどホストファミリーとの関係は暖かく深いものになりました。私がどんな家庭で育ったのか、どんな教育を受けてきたのか、何が得意か、ドイツに来た理由、将来の目標などについて話し、自分のことを知ってもらいました。特にホストファザーとはよく日本とドイツに暮らす人々の生き方について論じ合ったり、私の心配ごとなどを聞いてもらったりしました。



文化も価値観も違う環境の中で生活をする事は楽しくもありましたが、大変なことも多くありました。一番苦労したのは価値観の違いです。日本を離れて異なる文化に触れていると、今まで当たり前だと思っていた考え方も当たり前ではないと気付かされ、自分にとっての正解が通らないこともありました。日本文化の中で育った人として、自分がどんな価値観、視野、考え方を持っているのかを伝えることは大切だと思いました。

特に精神的なケアにおいて、日本とドイツの違いを大きく感じました。ドイツでは、基本的に生徒自身が自分の体調を見ながら学校を欠席するのか、もしくは長期の休暇を取るのかを決めるこ

とができます。学校についていくのが難しいときには、学校もしくは学年を変えることもできます。私のホストシスターは、学校の授業に集中することができず、5週間の休暇を取りました。復帰後は学年を1つ落としました。他にも私の周りにはセラピーに行っている友達が多くいました。日本にいた頃の私は学校を欠席することなどは選択肢でもなく、考えたこともありませんでした。日本の生活は早いリズムで進んでいるため、止まっている時間があ

りません。悩み事があっても、勉強に集中できなくても、それらは特に問題として扱われる事はなく、私自身に問題があると私の周りの人たちは言いましたし、自分自身もそう考えていました。そのため、ドイツの人々は嫌な事から逃れているのではないかと感じてしまうこともありました。ですが、ドイツの生活は日本とは対照的にスローペースで、家族で過ごす時間が多いです。時間をかけて自分自身の精神的な健康をケアする事はドイツの文化なのだと感じました。自分には衝撃だったことを、一方的に誤っていると見做すのではなく、おのこの国の現状と絡めながらよく考えて、異文化を総合的に見る大切さを学びました。

ホストファミリーは、私のドイツ語に取り組む姿勢を全力で応援してくれました。ドイツに行ってから五ヶ月が経つまでは自分の語学力に納得がいかず、悩んでいました。私はドイツに行く前からドイツ語の勉強を自分で始めましたが、いざドイツ人を前にすると言っていることが理解できても全く話せませんでした。毎日、早く色々なことが話せるようになりたいと思い、焦りを感じていました。そこで、まずはドイツ人の前でドイツ語を話すことに慣れなければならないと思い、ホストマザーをお願いをして、毎日ドイツ語の音読を聞いてもらうことにしました。これを一か月続け、三か月目以降はほとんどドイツ語で過ごしていました。私はドイツ人とディスカッションができるレベルを目指していたので、幅広い分野のことに關してのドイツ語を習得するために毎日勉強していました。実力と理想のギャップを感じ、それに辛抱する時間が長いと不安になることもよくありました。そんな時には、友達やホストファミリーに相談してドイツ語を教えてもらいました。さらにホストファミリーに質問をたくさんしてもらったり、ディスカッションの時間を作ってもらったりしました。自分で考えて積極的に提案をして、政治や気候変動など専門的な話になっても、意見を伝える力をつけることができました。

続いて学校について紹介します。私は英語、数学、地理を主要科目として選択し、それ以外には歴史、生物、科学、ドイツ語を受けていました。ドイツの授業では、まず資料を読み、課題を終えたらディスカッションに入る形式が多かったです。日本では基礎的なこと、簡単なことについて質問することをためらってしまうことが多いと思います。または自分が疑問に思ったことを質問することを恥ずかしく思う空気感があると思います。それに比べてドイツでは恥ずかしく思う必要がありませんでした。理解できるまでディスカッションは続き、どんなに小さなことを発言しても必ず反応してくれます。もちろん賛成・反対の意見も正直に述べますが、それは真剣に聞いてくれているからです。ドイツの人々は相手がどうしてそう考えたのかを自分で理解できるまで質問し続けてきます。私自身最初の2か月間は、聞いたことを理解するのに必死で、自分の意見を伝える力がなく、困っていました。ですが、私の学校では全員で授業を作り上げる認識が徹底されていたため、たくさんの仲間の力を借りて授業を理解して、使えるドイツ語を振り絞り、ディスカッションに参加することができました。正解を求める日本の学習空間とは違い、発想と過程を共有し合うことで視野と可能性を広げる授業が多いと感じました。日本の学習レベルはとても高いですが、このよ

うな生徒の積極性と創造性を活かす授業形態をもっと取り入れてもいいのではないかと思います。

今回の留学は、自分の興味のある分野で実際に活動をし、自分を試す機会となりました。私はもともと国連の活動に興味を持っており、食糧供給や持続可能な開発などに関心を持っていました。ドイツではゴミを徹底して分別し、自転車とバスの利用率が高く、家畜を食べないようにしようと呼びかける人がいることなど注目すべき点が見られます。何らかの抗議活動が月に2度は起こっていました。地球温暖化が問題視される中で、私自身何ができるのかを考え、まず、森林保護プロジェクトに参加しました。ドイツ中から約30人の人が集まり、木の苗を約250本植え、日あたりの悪い木の周りを伐採して整えました。森林整備についてのレクチャーを受け、環境保護活動について話し合いました。さらにサステナビリティに関わり、学校地域のコミュニティで古着のリサイクル活動を立ち上げました。地理の授業で、西アフリカに向けて先進国から輸出される古着が発展途上国の環境・海洋汚染やアフリカのアパレル産業の衰退につながっていることを学んだことがきっかけでした。学校のサステナブルウィークに、古着を回収して学校付近や公園で売り、NABUという団体に寄付を行いました。他にも環境に優しい材料を使った石鹸を作るなど、生徒を主体とする7つ以上のグループを作り、活動を行いました。



帰国してから、改めて日本とドイツの違いを感じました。私は留学を通して、相手の気持ちを察して行動する文化や、物事を慎重に行うところなど、日本の価値観や日本人の態度の素晴らしさを再認識しました。しかし、日本では積極性において物足りないところがあると思います。他人に合わせすぎて、自己の信念に一貫性がないようです。逆に、ドイツ人は自分の意見を曲げずに、妥協することが苦手な分、話し合いに時間をかけ、新たな手順を探そうとします。お互いの文化から学ぶべきところはたくさんあります。異文化を体験する際には、日本人らしさを失わずに、他の文化も大切にすることが重要なのではないかと思います。

留学後、私は将来海外で働きたい気持ちが一層強くなりました。英語だけでなく、ドイツ語を話せるようになったことにより、世界が広がりました。新しい文化、新しい考え方に出会うことの楽しさを見に染みて感じました。これからも未知の環境でチャレンジしてみたいと強く思います。この1年間たくさんの人と気候問題や政治について話したり、自分でプロジェクトを探して参加してみたりすることで、国際機関で働くと言う自分の目標を再確認できたと思います。国際的なステージでは、語学力に限らず、コミュニケーション力、多様な角度から物事を総合的に見る力が必要です。これからも挑戦し続け、大学で再度留学し、海外の大学院への進学を実現させたいと思います。